

20

文化四年『花供養』

花供養

校異 底本
高岡本 竹冷本

(表紙・題簽)

(表紙見返し)

序

石上古き一年木の間の花のとり庵の主の喰じ

出されしもこゝらあたりの事なるべし。されば俳諧おこりて後、道のわいだめ婆のけぢめも多かれど、盥に雨を聞れしより、世々はせを葉の響高く、其間に遊ぶ者、葦原の中津国に実こぼれり。かゝる大とこのこよなう尊ければ、玉葛たゆることなく、年々祖翁の像前にもものさるも宜哉。芳野に花供養あり。日枝に花摘あり。晋子は母のために、夏百日の発句を積て一集の名と成せり。

(序一才)

千早振宇治のわたりのあざりのもとより、わらはべの供養したる

初穂なりとて奉れる早蕨も外ならぬかは。今や蒼虬うしは、

先師の道をふみいやよひ中の二日定て諸人のをのがしうに

言出せる言の葉の花を束て、彼精神を祭玉ふ。やをらこの真

心のいといたうせちなるものから、不知火の筑紫おのこも、鳥が鳴

吾妻童もまう上り集ひて、南無庵と手を合ることのよしを、

ひなびたる文作りて、おこめかしかい付侍るは、人笑れならんかし。

峇文化四卯春三月伯陽応響舎沾雪謹序

印

印

一順

うへしたに雲置はなの盛かな

春をしづめる余所の有明

松柱わたり乙鳥に宿かして

かつてのよさにつかふ古鋤

毎日の飛脚はよれど用もなし

小魚の鱗をそめる初霜

恕裕

蒼虬

瓜坊

馬州

文常

此原

立別るくさど／＼の国境

何を焼やら土とりに来る

是ほどの住居に広き夜の明て

そら手ばかりが我病なり

旅人の夏めかしたる三輪の杉

行者の鈴を戴きたがる

瀬の音の北に廻れば日和にて

帆綱もつるゝ別れするかな

月峰

葦笠

岱李

千厓

霞潮

国雄

玉桐

籬邑

夕暮は思ひすてゝもむら薄

壁にゑぼしを打かける月

白櫃に栗飯などを盛ならべ

今と昔の木曾の麻衣

空はよき梅の咲たる道の端

つま乞声か烏啼なり

雛作る窓の明りもくれかねて

銭さへしらぬ母のくずをれ

居然

芦涯

百丸

百哺

一熊

桃雫

真菅

仏斉

武蔵野の便りも早き船の上

初夜とよいとの間がすゞしき

御垣守恋の関家と読れたり

笛がこけても胸さはぐなり

牡蛎籠に今朝の霰のきえ残

埒をつくる谷の山鳥

鋸の刃に引かゝる後れ髪

二度目の波に桶もとらるゝ

素林

其成

千代道

阿年

茂良

宇洋

玉洋

在貫

牛馬も役にさゝれし神祭

女ばかりが先膳につく

吹伝ふ松の調子のやはらかに

旧都に土器をうる

腹ぐるな事をも月に工出し

矢先とゞかぬ鹿の通路

末略

馬遊

荷屋

斗雪

布雪

百池

買羊

春の夜は水の上より明にけり

肥后

眠石

梅が香をぬけつくぐりつ片山家

菽泉

草の家の曙低し雉子の声

牧笛

春雨のはてを見てゐる夕かな

波弼

雉子啼てきじの鳴日と成にけり

壺溪

十日たち廿日立なり独活蕨

百児

ふるごとの花にとはれつよしの山

、熊本千種庵

秋郊

家ざくら月にもしばし見たりけり

李蹊

春の風ところ／＼にかはりけり

、
梧井

一日のすゝきを過て初ざくら

、
岫丸

霞のまへをはしる山水

羽人

竹簾春のをしさに柴さして

栗葉

はなしに来るも同じ鳥好

蘭戸

どつかりと月に捨たる豆のから

怨風

草より先に露のしぐるゝ

車夫

蟪蛄の袖に飛つく旅まくら

蟻城

七つの鐘に施薬はじまる

紅葉ちる家は大きな灯の光り

須磨のもどりの船よするなり

此ころ雨ともならず根なし雲

あした／＼にかはる紫陽花

月に借る宿の仏の匂はしく

筆のちからに秋を覚ゆる

ちらほらと島鶉の岩に来て

薙のけぶり幾所もたつ

慶遊 緑川 丸 人 葉 戸 風 夫 城

花のかげ鞆ながらに打ねぶり

扇のうへの葦草しほるゝ

川遊

春にあるこゝろの外の焼野かな
菜の花のはては峽のしら帆かな
夕汐の引のこしたるさくら哉
夜のおと聞つゝさくら暁にけり
はるの日の静になるも柳かな
山並を平おしにする霞かな

羽人 暁岱 怨風 栗葉 車夫 草斧

谷の家の庇おしはる雪解哉

山川や鳥の鶯ふる春の雨

夜は花の辺りに明る山路かな

葺かゆる屋根にとゞくや華の枝

雨はれて雲井に近し山ざくら

あめを鳴雲雀に遅き朝戸哉

松明の影に人あり山ざくら

梟の声も聞ゆるさくら哉

毎日のさくらにぬぐふ豊かな

三峨

荻里

虹夕

蘭雫

冬扇

連之

尺嵐

秋鳥

岨邑

先春になりすましたる雪解哉
春風にそろひ出たる小舟かな
追分の石ありつひて花すみれ
井戸ひとつ花に濁れる社かな
出代のこゝろ動すやなぎ哉
梅のちる頃よりみたり池の魚
鶯やたしかな家もなきあたり
月のさす花に声ある山路かな
春の夜やみだれてとゞく鐘の声

虎洞 巴友 砂石 茶夕 仙斧 松雨 千甲 蓼雨 斜葉

帰らんと背けば匂ふさくららかな

島にある身はくれかねる桜かな

水汲の手を延しけり藤の花

折れそうな枝ぶりみへぬ野梅哉

菜の花に今出た里の隠れけり

山近ふ見るほど春を惜みけり

暁を待にもあらし初ざくら

夕ぐれや桜ばかりが花盛り

いち時にあつたら桜咲にけり

壬辰

二扇

巨水

慶友

三考

雨鹿

貫露

橋巴

蟻城

花の雲山の外づら夜あけたり
まだものゝ春はかすかに梅の花
海士が門霞のはてはなかりけり
雨はれて雲るにちかし山ざくら
田螺とる家や野中の風の音
灯ともせば広がる花の匂ひかな
竹古ふなるや椿の花のいろ
明くれのありとも見へず花の上
白桃や梅の月夜は寒かりし

川尻 砂取

蘭戸 徹裘 丹泉 賦水 緑川 岫丸 瑚璉 之言 専和

春最中しろき日暮となりにけり 雨石

行春にみな生れたる雀かな 鳥朝

湖の鶯聞むみづのうへ 五嶺

春雨を何ほどながす宇治の川 白飛

枯荻のさし出がましや朧月 砂童

ちる花の夕ばかりは残りけり 散木

手も足も梅に冷たる山路かな 斗牛

咲ものと思へば早し初ざくら 文光

山越や鴈帰る日の曇りがち
鶯によればつめたし笹の露

瓜輪
雀笑

知恩院にて

夕ぐれはいとゞしだるゝさくら哉

肥前長崎 三省

関守のけふ花守と成にけり

諫早 梅江

心にもあまる桜の月夜かな

夏亮

留主がちの家ばかりなり遅桜

芳笠

風の夜や花の林に鳴からず

炉扇

時ならぬ鐘響くなり花の山

菅芦

散そめて又四五日のさくらかな

垣越に桃をへし折男かな

白魚や空に張合水の色

陽炎に心のとゞくはしら哉

春の雪三日降たる地のしめり

夜は夜とて人の歩行よ梅の花

ぽき／＼と折は淋しき野梅哉

眠たさに見やれば多き燕かな

松原やちら付てゐて鳴雲雀

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、長崎
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、

真黒に家の煤けて初ざくら

五加木の匂ふ起／＼の飯

春の鳥かはほりなども交るらん

傘のひとみへ誘ふ汐風

世の中は山根の月の古ざれて

露にふとりし草の有さま

麦の粉を秋の半にはたき出し

貴舟の宮の水は吞たき

馬蓼

馬卯

奇渚

如松

卯

蓼

松

渚

しつぽりと小袖も髪も新しく

先山茶花の日和なりけり

初霜をずば／＼と踏山の人

見どころ多き此ごろのはし

名月の程遠からぬ兀烏帽子

酒のすぎたる石工が秋

つゝ立て鹿の身をもむ冷じさ

夜明る際にもえる燈心

咲花を比かいわいに盗まれて

蓼 渕 松 蓼 卯 松 渕 卯 蓼

歌よみ達をそゝる蛙子

卯

梅の咲暮は小寒し一在所

肥前平戸

井甫

出かたのちがふ春の三日月

正阿

横堅に霞の中を網引て

李薫

鷺を放てばまた雲に入

甫

卯花を持ぬ軒端のさびしさは

阿

松に箒をつゝ懸て置

薫

馬で行双六打を呼りとめ

甫

踏ばざぶつく砂川のはし

浅くさの御堂の屋根が見えかゝり

鐘をぬらすほどの初恋

我袖は／＼とてなみだなる

月と露とは別／＼のもの

苧萱はすべて鶉の宿にして

たつたひとつも雁の来ぬ秋

氏神のかろき祭も仕損ひ

大きな石をこかす鬮とり

阿 薫 甫 阿 薫 甫 阿 薫 甫

咲花も是ばかりかと仰ける

何を植ても来なく鶯

阿 薰

春の水生松笠の流れけり

、 其外

雑魚はかる浜に出ばや春の月

文英

闇の夜もなくまいものか雉子の声

楚流

誰なれば仏なぶるぞ鳴田螺

吾鳥

ひつたりと咲ては花もうす赤き

五鹿

梯の手のとゞきけりうめの花

李薰

山深きやどりもたのし花のころ
鶯や竹の千尋の陰を出て

日向美々津 龍雨
吟龍

永日やまたも椿の落るおと

薩摩可附木 五岳

旅人の声かはし行柳かな

筑後久留米 芦月

花の陰飲たき水も流れけり

沙明

手のとゞく月の端なり梅花

文角

花低ふ見へて月夜となりにけり

雨のはなことに月ある夜なりけり

花巡りめぐればもとの山家かな

花曇松たつ山を裏あはせ

月ともに流にうつるさくら哉

日ちら／＼白き遠山桜かな

東雲の花は近よるとき哉

花の中人うつむきぬ仰きぬ

筑前直方 此原

棠丈

五雪

寄木

柳左

文化

市橋

求古

神さびて散花や咲かゝる花

橋雨

兎も角も花ちるかたへ行こゝろ

椿口

山里をすこし離れて夕桜

壺青

只一木月にあやなす遅ざくら

晚翠

夕空や花ちるかたの藁庇

涼眉

花の色さくらに重き風情哉

投巾

夢の間ぞ花ちりがてに成にけり

曙川

ちる花をけふはけふとて見たりけり

楓里

出がはりは霞の深き日なりけり

吉田

春江

行水に笑ふて覗く柳かな

姪浜 魯々

病身にして花に出る日は

駕かきは無心いひ／＼花見哉

浦詠

けふばかり雲も通ふな初桜

芦屋 一鏡

旅人になりてもたらぬ弥生哉

福岡 四軒

大寺や松の中より初ざくら

頓野 歌舌

仮橋のかゝるも花のころならぬ

魚水

是ほどな春にも雁を惜むかな

豊前中津 亀友

水ひた／＼草にかくれて春くれぬ
花を見るとことて住ば鳥も啼

郭釜

其嵐

朝風の吹出せばなく雲雀哉

豊後日田

素光

茶の煮る頃や彼岸の鐘が鳴

有篁

おゝけなふ折てくれけり桃の花

小浦湊

月虎

かち人の一日遅きさくらかな

対馬

曙堂

さゞ波や雉子鳴かたは小松ばら

雨柳

月にかざす野寺が袖や花すゝき

初嵐柳見かけて通りけり

檜桧谷一ぱいの月夜かな

松原に一本曙るもみぢかな

鳴たつてながめられたる嵐かな

仮着して更行舟や月今宵

名月に当てなく道を歩行けり

若草に火をうちこぼす山路かな

曙堂

雨柳

東指

都翠

歌声

兔丸

雨竹

長門赤間関

羅風

たらちねに似た顔もがな寺の花
家土産やさくらに結ぶ夢はなし

上ノ関 冬蘿
為充

往来の人声つゞく柳かな
能人に馴たるはなよ葦草

防州小郡 不占
古梁

遠山や霞につゞくゆふ煙
笛籟ぬ制札もがなうめのはな
鳥さしも吹れてまはる柳かな

石州福光 美言
臨江
浮根 湖東

柴の庵奢らぬ花の一木かな
湖に行とゞきけりはるの風
約束の心うごくや花ぐもり
春の野を遊び過して闇夜哉
香をぬすむ風に霞の関もがな
山川や花の浪たつ夕あらし
花咲て郭の昼の静なり
寝はせぬぞ芦火焼家の梅の花

出雲大社日々庵 浦安

、白沢園 有秀

、 寸苗

、 有風

、 雀子

、 扇風

、 露磨

神門知井宮 一釣

住吉の松がら吹やはるの風
仁和寺の裏の木戸さす春日哉
雉の声あらしを起す山かづら
春の雪月は宵／＼見えて降
花守や煙をかくす古すだれ
梅咲とやうも告けり今朝の風
斧の音に鶯瀧をのぼりけり
白魚の花ちりてもとの流かな
山鳥のをのが迷ひて春くれぬ

其風
龍池
波濤
燕子
花叔
橘隱
下古志
芝及
露光
三千丈
東廬
上古志

都にも夕べがあつてなく蛙
 菜の花に京へるつまの嵐かな
 行春は川辺の垣にうつりけり
 吹風もいとはぬ花の荅かな
 山陰も桜に闇はなかりけり
 雪は空に消て見せけり初桜
 人の世はあれでも志賀の桜かな
 香をとめて垣をさぐるや闇の梅
 梅のちる日はかはきけり古草履

、
 古志町 澄水
 杜若
 、
 李郷
 、
 魯山
 稗原 よの女
 、
 志津女
 、
 池月
 、
 都水
 神在 三都良

関寺をひくふ見せけり春の月
聖廟や白髪に薫る夜の梅

、 百丈
小田 其宗

酒のむは花を大事と思はずや
雲雀落て草のあらしと成にけり
ひとり居の明て出けり春の雨
暮かゝる日にしづかなりはるの風
蝶ふたつわざとならざる風情なり
これのみを己が花実やつくし

安芸ヒロシマ 梅仙
、 峰貫
、 豊浦
、 霞柳
、 宮島 荅菊
、 中村 梅山

唐崎や松のあたりの夕がすみ
時しらぬうら枯見たり菜種花

、
、
蒼虬 五由

鶯の背丈伸けり花すみれ

備後福山 牛後

うれしさに笠着て歩行桜哉

、
黄葉

正月もすむや夜明の雨のおと

、
李明

あの山がありて春行草木かな

、
羽白

ひとり居て見れば小寒し梅の花

、
撫月

又花につかはれくらす日数かな

備中

寄居虫麿

際立て青き空なり焼野原

、笠岡

古音

数ならぬ枝折添て花供養

、李山

世の中やたがひちがひに花のちる

播州魚崎 蘇明

降ずともすむ姿なり春の雪

伯州大谷 沾雪

世に用のなき身や投ん花の瀧

、牧牛

雨にくし花ものいはぬものなれば

、徽州

顔出して雨見る春となりにけり
 花ざかり月夜となりて嬉しけれ
 ちる花やいとま給はる白拍子
 夕焼に日かげの椿光りけり
 遅ざくら日南とならぬ山はなし
 人の氣の野山へうつる二月哉
 径ありあるじをとへば山ざくら
 遅ざくら埒もない樹にはさまるゝ
 行春やしなりくなりと麦の中

久古 沾荻
 三崎 仲麟
 法勝寺 文虹
 三崎 碩遊
 湖内 湖水
 寺内 新風
 米子 富門
 浜大谷 里月

春の雲序に花のはしとなる

炭焼の袴着て出る春日哉

落椿虻さへかくこせぬ間なり

いつ出来し花のあたりの小家哉

人来れば咲人去れば散る椿

春の月浦家にはまだ啼千鳥

さればこそ吹やんで後の梅の花

川岡 蘭玉

車尾 光器

米子 和月

日去津 徐来

伊賀上野 峨月

、 梧鳥

、 楮来

日も薄く桜に沈む外山かな
浮世めかぬ所も花の盛り哉

総州結城 詩舫
、 其章

鶯や山一ぱいを啼渡し

因幡岩井 鳥城

里遠き広野の鳥井霞けり
はかるほど桜ちりたる小庭かな

但馬二方郡 月波
、大養父 鳳兮

下臥や桜をもるゝ日の光り

丹后后野 舍琴

雨ばれや思ふあたりの初ざくら

ひつそりと月影にちる桜かな

しづかさの雲置添て花の山

あのやうにちるや桜のかたあらし

三日の月花はひとつに暮にけり

長閑さや女波ばかりの和歌の浦

鶯の啼てゆくなり柴の上

さゞ波や月のうへ飛ほとゞぎす

、加悦

如琴

、

馬琴

、

箕山

、宮津

武節

、石川林

蛙音

、

枝鳥

丹波大山

兔原

、

尋河

白魚をすくひ上たる寒哉
 さくら散て月に重る夕べかな
 苗代は猶万代のけしき哉
 灯のきえて夜ふかき蛙かな
 大きなる月を見すかす柳哉
 さみだれの晴て汐木の匂ひ哉
 朧月鳥はよく寝てしづかなり
 湖と青田の中の小家かな
 木啄や秋は静けき山桜

、
 、
 、
 、
 、
 、
 、
 篠山城西 弘三
 東眉
 季柳
 岡眠
 梧桐
 鯉三
 其屋
 二桂
 朝於登

閑古鳥啼ほどもなく飛て行

鶯のおりてあるくや苔の上

鶏と雉子も遊ぶや山の家

柴の戸は西行ざくらしをりかな

ちる花に口ひろげけり雀の子

初桜ひとりおくれて山の月

法輪は日ぐらし寺や花の頃

言の葉のちりかゝるなり朝桜

、
東亭

、
武陵

氷上村
魯縞

、
攝州池田
瓜坊

、
李杏

、
遅春

、
三好

、
口谷
未徹

初桜ことに小家の隣かな

、伊丹 比良

川わたる心となりぬ花の雲

、 駒房

何ひとつけしきはからず花の山

、大坂堂島 米彦

灯を見せてあれば散出す桜哉

、女 桃葉

浮世ともいふべき花の盛かな

、 瓢介

山ざくら弥生がうへの化粧かな

大坂 松月庵

空おもしろく霞む東雲

行雁の声にみづから火をうちて

としに一度は地子を免ずる
きぬ／＼に流れを渡る月の影
苞をになひし露のきくらげ

右独吟

青柳のうへのす鷹の静なり
さげ髪や顔にゑくぼの小松引
芦の芽や鴨の古巢の春の富士
此君にもたれて雁の帰るとき
葛城のしたゝりいくつ春の水

、 芝卜
、 女 と美
、 少年 市正
、 少年 里友
、 燕子

こゝそことねぢ折花の夕かな

風少しあるも桜のながめかな

むつくりと桜のうへの月夜かな

咲花の木間にあるや鳥の道

木啄の背にかゝらで飛蟻かな

初花や思ひかへせば宵の月

陽炎に寄てはすたる女浪哉

鶯に建てもらひし小家かな

飴松

、 万和

、 松人

田日

、 花叔

伊丹 能岳

尼ヶ崎 春人

伊予川ノ江 東里

、三島 燕国

草鞋はく心になりぬ梅の花

、小松 霞耕

明星も桜となりて夜明たり

讚州仁尾 宗徳

嬉しさや年木はづして初桜

、 卜仁

はつ花やまだ寒げなる山の家

、 有隣

峰の雲手にとれそうな春の風

、 歌長

蒸殿の立姿よしうめの花

、 去鹿

兄弟の子もほめられつ梅の花

、 風馬

此笠の重るまでちれ夕ざくら

阿波

壺大

田一枚持ば夜／＼なく蛙

泉州堺

金花

あとからも鳥雲に入る木幡山

伊勢神戸

素隆

人声に又分入や山ざくら

白子上の

雲子

さくら咲かたや鳥啼朝朗

、
、
、
祐之

おもしろや花の吹雪にかこまれて

、
、
幽蘭

ぼ（濁ママ）ゐ／＼となにか花みてひとり言、

、
、
斯西

行て見ればひとり住なり花の宿
きのふから草履うるなり花の宿
若鮎や落花をつゝく夏箕川
渋谷や花のかげをく古すだれ

笛の音に朝の青柳しぼりけり
蝶／＼や夜もよしのゝ川を行

おのづから鶯の啼日和かな

、津 霞外

、 幾久賀

、 他力

、 竹至

伊賀上野 乙夕

、 士得

尾州名古屋 大蘇

犬の子のまたゝきしたり飛胡蝶

表

我を見て立しか雁の別れ哉

雲か花かとおもひやる空

春風にのりも定めぬ舟かりて

あとなき事もおかしがりけり

唐墨の匂ひ渡りし翠簾の中

松のけぶりの静なる秋

下戸どもを月のかつらと諷はばや

東陽

浦且

大蘇

珉屋

五道

大蘇

浦且

五道

袴のひだをみだすやゝ寒

珉屋

露の道塩焼くはまに遁れけり

三河新城

藍洲

霞ねば物たらぬ日と思ひけり

相模荻野

東洞

気がゝりや花に明行鐘の声

、

几柏

曙は桜の夜とぞしられけり

在京

牛道

山ざくら世のよき妙法もありふれて

サガミ平塚

帰山

屋根ごしに影ある夜の柳哉
逢坂やさくらすり行夜の袖

、
房州

桃阿
東居

朝雨や花のあるじの袋米

奥州南部五戸

三豆

ちる花に月もさしけり植柱

、
仙台

子孝

雉子の声折／＼は風の止みてけり

、
南部五戸

雲臥

雨をふくむ山のはるかに揚雲雀

、

子甲

花の外にへだゝるひなと都かな

、

斑鳧

陽炎や大かた人の住ところ

、
ミヤコ

北溟

(二五才)

山陰や屋根ふきかへて桃のはな

信州飯田

梅彦

梅が香はかげろふのたつあたり哉

、

栢居

松風に鶯の鳴藪木かな

、

保三

土足の鳥を見ても春日哉

、

三都良

我丈のとゞく処や梅の花

、下イナ林

風子

白象を出すべき夜なり朧月

南京僧

五柳子

やまぶきの中を出てくる湯川哉

、

志桂

梅が香の二夜かゝりし板戸かな

、

知足

黄鳥のつらゝを落す草葉哉
冴かへる里の花なり赤つばき
住吉は泥の三月三日かな

飯田

蕉雨

、

雨鴻

、

何頼

桜咲世に逢坂の人ごゝろ

飛驒高山

儲史

花の中むかしから名のふたつ岩
先がけはしたり顔なる花見哉
雨ばれは朝のこゝろや花の中

越後中野村

霞翠

、徳田

翠甫

、仙石

柳居

(二六才)

花の香を吹入る柴の扉かな

花の空籠の鶯はなちけり

越山や雪のこなたに初ざくら

はせを堂を尋て

此道に入らずば見まじ初ざくら

夜の梅にほひに闇はなかりけり

鶯啼や土屋わらやの雨の躰

春の雪窓へ吹こむや日のさすや

、

、目来田

、塩沢組小松沢

峰雪

里竹

亀面

、水尾

素琴

、大崎

桃之

越中富山

嵐丈

、

如岡

(二六ウ)

梅が香を樹々にわけたる月夜哉

花の咲中にも松の一木かな

鶯に月さすくれの小窓かな

青柳の日は西へ入る川辺哉

夜に入れば火を焚花の後哉

薄がすみ又松風の吹んとす

枯枝の落るけしきや雉子の声

小田に啼蛙の目にもちる花は

駒鳥の声はたゆまぬ小雨哉

、 、 、 、 、 、 、 、

馬城

路月

鯉里

宇井

魯長

東映

亀遊

鳳章

子碩

すみれつむ手先にかゝる西日かな
のどけしや子に啼聞す親雀
人となりて後思ひけり二日灸
蝶の羽に風見る日なり弥生山
山陰やすみれに並ぶつく／＼し
雁行やつゐに二夜の船どまり
藤の花曲突ぬりて遊びけり
朧月杉の赤葉のけぶるか
水音の又低ふなる霞かな

、
、
、
、
、
、
、
、

田胡
右枝
洒布
玉燕
素僊
可一
路方
如是
士芳

酔も酒も涌たり里の桃の花
里の名を先聞さくら咲にけり
花のちれば小田の蛙も声高し
朝風や北むく雁の友きほひ
星の梅一つづなりに見ゆるなり
啼あはす関の網戸や猫の恋
巢の雲雀蕨によれば柳株
田の幣の吹もちぎれず春の雨
浅茅生に雲雀の出入のどかなり

、 、 、 、 、 、 、 、

素甫 一甫 二龍 白雄 子由 子猷 梅下 如柏 魯扇

春の塵下にはおかぬ雀かな

川の名の花にとられし盛り哉

明てから数をましたり藤の花

鳥のともや花のけしきを持って来る

花につれて二筋三筋山の雲

白藤の咲所には水のあり

ちる花や思ひ捨てぞ珍しき

童から先野堇と告にけり

朝毎の春引あぐる雲雀かな

高岡内海更

、

乙竹

菜朝

、

里修

、

文鳥

、

芦舟

、

花農

、

真葛

氷見

井齊

、

祐之

ゆふだちの音して下る百千鳥

いつまでもおほかげのかぬさくら哉

常盤木をなべて桜の曇哉

行春をうらむる鳥か春の声

道守やさすがに葦かり残し

見るまでは折とも言し山桜

春の水動く所の家鴨かな

傘さして行ば田毎の蛙かな

梅の月思ひし事の寝かねけり

、

、

、

、

、

、

、

、

、

春潮

豊曉

蘭陵

不全

うら主

女仏

松花

雪みち

南枝

春の猫よごれてかへる草の丈

我影を立のぼりてや啼雲雀

春雨や山へ鳴込くれの鐘

うぐひすや雪のふる日は何を喰

蛙啼そこらに雲や広がりぬ

ついはれる霰を梅の苔みけり

面白う桜から散月夜哉

唐崎の夢は破れし雉子の声

里人の朝寝を仕けり梅の花

、
きつら

、
樹嵐

、女
柳子

、
李亭

、
移文

、
野春

、
菊二

、
可近

、
梅眠

出代やこゝろふたつのあはれなり

山桜咲ばこそみれ常のもの

うぐひすや山のゆふ日をうしなふて

松風を甘日もきかぬさくらかな

花守もかはりし事はなかりけり

日は山をはなれて梅の雫哉

山かづら直にさくらの曇り哉

白梅やすなをに明る朝朗

目に見ゆる嵐となりし桜かな

秀台

馬太

八子子

文器

曾由

梅仙

如龍

孤林

草風

笹の葉の雫つもりて春の水
雪どけや漲るすゑは湊川
菜のはなや家持郷の古屋鋪
夕ぐれや萩の古根に啼蛙
菜の花や畝一筋にゆふぐるゝ
木づたひに鶯遅し軒の梅
長閑さや寒ンだけ過し鞍馬口
永／＼と人行春の縄手かな
藪に来る鴟も春には春の声

、 共和
、 有隣
、 歌兆
、 如友
、 白雄
、 樹徳
、 二翼
、 大西更 海農
氷見鞍川 風唄

散るものとひとつに暮て花莖
 山の花一度にちらす風もがな
 暁の空より直に花見かな
 鶯や田畑やしなふ水ぐるま
 古寺の名ばかりたるゝ柳哉
 松淋し其夕暮に啼蛙
 灰汁を焚山辺も春の柳哉
 朝蝶や野守が菴のあたりより
 蛙啼上は甲斐なき月夜哉

、 、 、 、 、 、 、
 魚津
 大翼
 東敬
 文景
 魯山
 菊芳
 徐生
 萁竟
 巴良
 狐山

雨の日や藪の中なる雉子の声
梅咲やねぶたき雨の晴上り
折ふしはつまづく道や梅のはな
菜の花や中なる家を明はなし
春雨の岡に煙の登るかな
日は入て花高うなる桜かな
車水外へ流してなく蛙
春雨や東寺の鐘は夢の中
あながちに日向ばかりの初桜

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
朱鹿
貞志
柳台
一叟
鳥紅
芦花
鳥隼
眉秀
平疇

くゝる日の水にうつりて梅の花
日帰りの里に見て来る柳哉
静さや入日かゝへてちるさくら
網戸もる灯の影薄し鳴田螺
吹わける柳や水のうす曇り
人待も春の山辺や雉子の声
松風に散らぬも梅の匂ひかな
菜の花や夕日まばゆき一縄手
年々の人やかはらではつ桜

、 、 、 、 、 、 、 、

其桑 世器 竹雅 軌長 錫我 志明 呉人 可融 可碩

咲かけて気遣ふ花や嵐山

長閑や鳥屋をはなれて鶏の声

そろ／＼ともとの道なり花の山

散かゝる中に静けき桜かな

梅が香にかけほぐれたる時計哉

朧夜に背戸は淋しき蛙かな

ちる花や睡うごかす牛の声

隠家の春やあぶなし梅の花

梅の花越の菅蓑晒にけり

、
慶了

、
如乙

、女
のぶ

、
燕之

、
桃塙

、
金戈

八尾
芭光

、
寛路

、
李夫

鶯の雨にぬれてや谷わたり
 川の瀬や松にも吹す朧月
 我影も朧なりけり水の月
 誰やらに思ひの増る桜花
 立どまる人に小家の柳かな
 笹ふかき門に新し春の月
 一本の花にひかれて暮るかな
 花の山二道かけん宵の月
 白雲のたつや睦月のはだか山

、
 霞叟
 、
 祖柳
 、
 梅公
 、
 文水
 、
 牛嶺
 、
 和水
 、
 五陵
 、
 二慶
 、
 観雅堂
 、
 都立

雨の日や戸口にひとつ蝶の夢
日は峰に禁は暮て蛙かな
隠れ家の道とてしだれ柳かな
あけぼのや烏啼行花のうへ
年／＼や花の匂ひに人の顔
花の色にひかるゝ墨の袂かな
撫仏まいる道なり花の山
白梅に落味憎かほる小寺哉

、 、 、 、 、 、 、

波雀 寿仙 如流 蘭風 桃夫 枝白 貴的 東花

鶯の春にして行山家かな

加賀金沢 兎文

穂屋なれて雀おくせぬ花の中

、 逸竹

人里のちかき処や初ざくら

、 雪橋

帯とれば野中の花と成にけり

、 里花

桃といふ隣持たるさくらかな

、 馬紅

二日散る桜何ともなかりけり

、 嵐堂

梅の門旅先ことば言捨て

、 三京更 年緒

潦ながれうければすみれ草

、 龍居

つくろはぬ宿や先見る梅の花

、 高松 自明

片側は木の芽延かつ山路かな
見ふるさぬ花のさかりの西東
西山や夕日もくれて花の雲
賤が家も明はなしたる桜哉
山川の冬すむ頃の杉菜哉
一木づゝ雲にとられて桜かな
日のくれる事なき物よ花の陰
行とゞく程は柳の手がらかな

、
粟崎
北台
、
稻梁
、
子来
、
至峰
、
春紅
、本吉
春輝
大聖寺
蘭皋
、
磯水

重くても見ばや夕の花の雲

能登獅々子窟 玻井

呈芭蕉堂

遠きむかしを名にしかはらず

おなじく

千里の流世にや増らむ

天津みそらの月の山下

絶せぬ色ぞ花にありける

川すぢを行ば桜の山路かな

、
加由

我も斯桜に並ぶ朝ごゝろ

越前丸丘 素更

水の行ゑを霞む遠里

甫立

流石にも継尾の鷹の春なれて

糺青

杉のまさ木をさく／＼枇

友甫

三日月にあすのけしきぞ見へにけり

振々

柚子の匂ひに舟のつれ／＼

巨眼

あり／＼と野菊の中も小町塚

里晴

人待ひとか松を結びて

古蓼

涼しさのあまりに髪を引むしり

瓜篋

雨に啼よる夕ぐれの鷺

置砂のうへは塵さへなかりけり

知るもしらぬもはやり眼をやむ

振残る魚の市場の月を見て

虫音低き石の小やしる

各詠

木つゝきのつゝき出しけり遅桜

身を古く思ひ初けり花ふみて

彼法師が意にはそむきながら

僧

文蘿

一透

哲水

一吼

竜至

仏角

糝青

物かはといへどさくらの盛り哉

花のうへけふも其まゝ暮にけり

桃灯のもへ穴張や山ざくら

草ふまぬ里や都の花ざかり

露むすぶ庵りに浅黄桜哉

朝虹の白くなり行花のうへ

めづらしと先いひそめぬ山ざくら

白／＼と人のほこりや月の花

桜ほど人の寄木はなかりけり

振々

瓜簍

一吼

巨眼

里晴

文蘿

素更

一透

友甫

かる／＼と日のおしうつる花のうへ
古蓼
日は花にとられてくるゝ桜かな
行脚
花の雲いづくへ道をつけて見ん
竜至
年あれば花あり我も其木陰
甫立

ちる桜中にめでたし山の家
若狭向笠
貫唇
踏まがふ路おもしろし山ざくら
食見
花雪
西の雲も東の雲も桜かな
小浜
李兮
花千鳥木にもくさにも声すなり
北前川
寿卜

焼残る岩根に高し赤つゝじ	気山	青柳
故郷をうしろにしたり山ざくら	成出	北洋
花の時公事の出来たる桜かな	、	山菜
野に山に春の落着二月かな	生倉	節之
青柳の風をはじめて散さくら	小川浦	謀一
波雲や峰の桜の中を行	神子浦	十鼠
やぶ入の松風も聞在所かな	、	柳渕
若草は雨もつ空の静なり	、	楽鶯
山ぶきの花うち越て朝日哉	、	燕柳

伐捨る木もなき春の山辺哉

田井

牛戻

鶯に今朝も消すなりあかあかし

江州水口

蜃州

売残る雛につら／＼西日さす

、

其友

門外や葦酒交りの山ざくら

日野

松羅

坊の屋根かへる目じるし花の中

、

紫英

いふ事の皆になりたる桜哉

田井

重塊

朝ごゝろ花は一重にさだめけり

愛知川

松風

仙台よりの便に

陸奥はあけぼのはやし花のうへ
花盗む人は栄花のあるじかな
興つきて寝た人もあり春の雨
花ちるや鳶の下行夜の雲
鳥までが皆おろかなり春の山
田へ移る檜の木久し鳴蛙
うぐひすの声の近も霞みけり
引鴨につれてなくなる余寒哉
梅が香に下駄の緒むすぶ畠道

八幡 栢翠
湖東麻生 不得
三ツ屋 来車
堅田 籬邑
、 几頂
野田 寵山
、 連山
舟木 獅丸
万木 鷺泊

ゆりおこす程に桜の盛りかな

北嶺

いつく島にて

月丸く桜吹こむ舞台かな

素雁

さし汐の鳥井に朧月夜かな

全

若竹のほとりから夜の明にけり

高島

春衣

月の下に花を抱くあらし山

大津

宇洋

花の雲それから上は夜の山

三井寺

千影

人中やかる／＼とちる山ざくら

申齋

五来

風重く土埃する暑さかな

山城伏水 霞潮

草鞋の足を冷す夏川

全

野も山も何を隔て暮らん

全

花守の家から花の見へぬかな

城南寺田 良水

花に響く丹波の斧や嵐山

、 雲裡

春の雨嵐となりし夜明かな

、 野尻 魯長

傍に大禪師あり山ざくら

京 斗雪

田の水の梅までとゞく山辺哉
鳥が啼いまや暮むとちる桜
薄月よ花かたげたる我世かな
みてもどる人なつかしき桜哉
小童のもふ商よ花の里
盗みたる花大かたは散しけり
万歳に聞ばや雪のよしの山
薄曇る花や百畝の麦畠
花供養七十二日ひと日過ぐ

月峰 百嘯 百池 玉桐 芹水 荷屋 布雪 馬遊 居然

ゆきくれし花の木陰や志賀の宿

京出て花の都とおもひけり

咲満て枝の瘦たる野梅かな

空色の日傘かたげて花曇

夕がすむ祇園あたりの灯かな

散花に月のかゝれば消ぬべし

青天の花に数敷薙かな

海士の家に梅なればこそ咲にけり

桜咲馬酔木咲うるはし泊瀬山

一態

其友

不染

春峰

二松

魯淵

国雄

仏斎

千代道

みちくるや汐にかけさす山桜

待ことのひとつ出来たり花供養

花のかげに我も飯くふひとりかな

犬も出て遊ぶ桜の月夜かな

雁鴨も未だ居る花の入江かな

山の夜はともし火までも花ざくら

くもるとは期して朝どき花のうへ

青草の日和や伊勢の神桜

いかにして草木は青きねはん像

闌之謝

其白

其成

橘栄

芦涯

阿年

岱李

茂良

百丸

玉藻

美しき空大事なりはつ桜

雨の音花なき門の夕かな

川越て花にとゞくや茶の煙

散がての桜にさがの月夜哉

靄とれてはらりと露の桜哉

咲花のけふも朝からぬる雀

山みつの花は嗟峨なり日ごろなり

ちる時をおもしろがるも桜かな

散て後花はちりしと思ひけり

宗賀

在貫

玉洋

ト友

知大

宋也

玉屑

真菅

蒼虬

遅来

鶯の飛やひき音の残る竹

流れ鶉をついには包む霞哉

草のいろうつるやうなる小鮎かな

鹿の角落るものとて落しけり

花に添ものとして春の葛屋かな

あすのけしき定りてから落椿

雲を見に歩行に似たり山桜

春さむしまだ三日月も見ぬ夜哉

越中井波 路太

、 胡山

、 籟丈

、 馬園

、 甘吾

、 訥齋

、 素兮

、 杜秀

竹川や鶯啼て水ふかき

花満て鳥の声なき山路かな

竹寒き日は鶯の来るものよ

鶯や接骨木嗅き顔がまへ

鐘の声暫時霞みて暮にけり

朝よさの四つ五器花に面倒し

手がりのない藪下の梅の花

梅花ちるや夜明の薄ぐもり

、
柳尾

、
泗水

、
文可

、
史朴

、
丸磨

、
汶弄

、
梅甫

、
十二歳
麻丸

青柳や見はりて居れば水に似る

これがため月の夜はなき椿かな

有たけの水の嗅さかちる椿

蛤の汐に残りて朝ぼらけ

ある夕べある人潜る柳かな

ちる花の二日もはやき思ひ哉

菜に残る雪の日南や雉子の声

みよしのや夕べの花に思ひ人

全福光 波弓

、 巴船

、 文蒿

氷見クラ川 松翠

戸出 玉可

、 幾秋

、 杜圃

、 玉鳴

現なく墨にすりこむ桜かな

灯ともせばいよ／＼をのがさくら哉

かげろふの掃よせられし垣根哉

砂風を起すけしきの茅花哉

梅がゝの真中になるはしら哉

福引や鍋をいたゞく白拍子

行春や入江の玉藻刈のこせ

海棠のねむりや雨も覚し得ず

一日も十日もおなじ木の芽哉

加賀金沢 雪雄

、 百風

、 五葉

、 嵐二

、 年風

、 旧堂

、 文溪

、 森下 玉宇

、 尺見

山風の桜をしごく夜の間かな
山畑の麦にかくるゝすみれ哉
雨の日の山吹かづく小鳥かな
うぐひすやなら坂こゆる昼の鐘
山鳥の尾にかゝりけり藤の花
ほの／＼と明行花の林かな
行雁の声も霞と成にけり
雉子の尾のかすむを分る夕日哉

筑前秋月 聞香庵
、 山螺
、 芋坡
、 六川
、 荷山
、 兔暁
、 無好
、 暁秋

いつの間に露をく花の夕かな

大和六田 河洲

梅に月是より残る寒かな

八幡 葦笠

苗代のしろきは日枝によるものか宇治

在中

松杉の中に桜はさくら哉

之風

梨子の花まことのあめにしだりけり

東都在宇治 馬州

大仏の鐘のひゞきや雛の宴

、 泰峨

暖みつく野山の風や百千鳥

日の出るも月の入のもさくら哉

里向ひて山寺の猫啼にけり

朧夜の月を鳴とる蛙かな

三月や根から咲たる山ざくら

取沙汰やもの喰うちも散桜

湖東八幡 芳之

湖南走井 烏頂

堅田鳩組 友鹿

紫溪

文常

庵裡 千崖

芭蕉堂書林

京都烏丸下立売上

勝田善助梓

(裏表紙見返し)

(裏表紙)